

芸亭

Nara Prefectural Library and Information Center

奈良県立図書情報館

vol.9

うん

てい



出版社の倫理

千田 稔

世の中、スピードが要求される。人間にとって良くないことである。人間の身体に宿るスピード感を超えようとする。何か物を作るのに念を入れて、端正をこめて作るのが正道である。最近の本は作りが粗雑である。制作のコストを抑えるために、製本が簡易である。早く店頭に出さないと、内容の賞味期限が切れるという。そのことと裏腹の関係なのか、賞味期限が過ぎた本を出版社で在庫にするとそれに税金がかかるという。だから、本を断裁して廃棄する。よい本だと世間に認識されるまで時間がかかる場合がある。でも、長く在庫できないので影も形もなくしてしまう。このことについて出版社は責められるべきである。本を大事にしない出版社の倫理感、本を大切に、本を愛しく思う読者たちの哀しみを誘う。断裁される本の現場に立つことはできないとしても、著者は身を切られる思いだ。

こうなるとふと考えてみる。オンデマンドによるデジタル本の配給システムがよいではないか。これなら在庫本に対する課税はなくなる。出版がその方向に流れることは、容易に予想できる。出版社のシステムが優れていたら、瞬時に読みたい本が目の前にあらわれる。プリントアウトして、自作の表紙を作るのもよいだろう。

だが話を蒸し返すが、在庫の出版本をもつ資金もないならば、臆面もなく、文化発信地のような顔をして、出版社を興すことはやめるべきだ。

Contents

巻頭言 出版社の倫理	1
調査相談カウンターから	2
司書の見方・味方・ミカタ 「相互借受」サービス	4
奈良のもの・ひと⑨ 「大和郡山と金魚 今昔ものがたり」	6
地域資料から昭和の 奈良県庁舎建て替え	8
「お知らせ」と事業紹介	9
イベント・展示より	10
所蔵資料紹介	12

調査相談 カウンター から



Nara Prefectural Library & Information Center



“レファレンス・サービス”という言葉を目にしたことはありませんでしょうか。『図書館用語集』ではこれを、「情報を求めている利用者に対して図書館が提供する人的援助で、情報そのもの、または情報が含まれる情報源を提示・提供すること。貸出と並んで図書館の利用サービスの中心となる業務」としています。現在多くの図書館でレファレンス・サービスが展開されており、「調べたいことがあるけれど、どのようにすればいいかわからない」といった利用者の方が相談できる窓口を設けています。館によって名称は異なりますが、図書館情報館では、3階に「調査・相談カウンター」として2席用意しています。以下に、実際にカウンターで尋ねられた事例を2題ご紹介します。

質問

01

日本の文化を海外に紹介した本を探しています。日本人による作品で、明治期から大正期にかけて書かれたものはありますか？



依頼者が例として挙げたのは、『茶の本』（岡倉天心、1906年）、『武士道』（新渡戸稲造、1899年）、『代表的日本人』（内村鑑三、1894年・改題1908年）でした。いずれも英文で刊行され、後に和訳が出ています。

まずは時期や日本人といった条件を無視して広く関連書を探そうと思い、日本文化の作品・人物として思い浮かんだ「鈴木大拙」、「ラフカディオ・ハーン」、「陰影礼賛」をキーワードに加えて、これらに言及する本がないか、外部の検索サービス（※）も使って調べていきました。

最終的には、「日本文化論」「日本人論」として引き合いに出される本の中に、今回の条件に合う『東洋の理想』（岡倉天心 “The ideals of the East, with special reference to the art of Japan”として1903年に刊行）を見つけました。依頼者には、同書の解説（『日本文化論の名著入門』）と併せてご紹介しました。この他、昭和初期の刊行ではあるものの、海外に向けて書かれた『禅と日本文化』（鈴木大拙 “Zen Buddhism and its influence on Japanese culture”として1938年に刊行）もご紹介して終わりました。

なお、今回は時間がなかったことから断念しましたが、英語で出版された著作を調べるのに、国立国会図書館や米国議会図書館のインターネット上の蔵書目録を、主題（「Japan - Civilization」など）や言語、出版時期を絞って検索し、英語タイトル・著者の一覧から探していく方法があります。また、日本で出版された翻訳書の目録『翻訳図書目録』を用いて、原著者が日本人のものを拾い出すという手もあります（ちなみに外国人が書いた本を探すのであれば、『事典外国人の見た日本』（富田仁編 日外アソシエーツ 1992年）など、事典・目録がいくつかあります）。

※ 本のタイトルや著者名だけでなく、目次やあらすじなどの情報からも検索できる次のサービスを用いました。

- ・「Webcat Plus」（国立情報学研究所、<http://webcatplus.nii.ac.jp/>）
- ・「Googleブックス」（<https://books.google.co.jp/>）
- ・「NICHIGAI-WEB BOOKPLUS」（日外アソシエーツ、当館契約データベース）

【参考文献】

- 岡倉天心著 櫻庭信之ほか訳『茶の本 / 日本の目覚め / 東洋の理想 : 岡倉天心コレクション』筑摩書房 2012年
：「東洋の理想」は、日本美術の歴史的な流れをアジア文化との関係で論じたものです。冒頭の“ASIA is one.”（「アジアは一つである」）は、大東亜共栄圏を支えるスローガンとして利用され、戦後は一転して批判を受けました。後の見直しの動きも含めて、様々な評価がなされてきた著作と言えます。
- 大久保喬樹著『日本文化論の名著入門』角川学芸出版 2008年
- 鈴木大拙著 久松真一 山口益 古田紹欽編『鈴木大拙全集』増補新版 第11巻 岩波書店 1999年
：『禅と日本文化』は、禅が日本文化に大きく影響していること、禅とは何かを説いた著作です。
- 日外アソシエーツ株式会社編『翻訳図書目録 明治・大正・昭和戦前期』日外アソシエーツ 2006-2007年
：全4分冊で、第1分冊は総記・人文・社会分野の翻訳書の情報を、原著者名順に収録しています。

(平井 梨絵)

「大仏商法」という言葉があります。大仏を見に自然と観光客が集まるので顧客開拓に消極的、という意味だと思いますが、この言葉はいつごろから使われだしたのでしょうか？

以前にも似た質問があり、それを見ると『奈良市史』や岩波文庫の『人国記』に記載はなかったと記録されています。館で契約している新聞データベースや、地域資料コーナーの経済・産業の分類の本、「県民性」等のキーワードで検索した本を探したところ、昭和50年代後半(1980年代前半)から次のような用法が見つかりました。

1.「古都の対決、外食産業“大仏商法”ショックの奈良」(『読売新聞』昭和55(1980)年8月18日 大阪本社版夕刊)。奈良市内の飲食店は「万事スローモーな“大仏さん商法”である。これに対し、手ごろな値段とスピードが売りもののファミリーレストラン方式はたちまち人気を集め、地元の同業者にショックを与えた」とし、結果としては現在と似た意味になっています。また、2.『創立35周年記念誌』(奈良商工会議所 1982年)P.101には、座談で大型店舗の進出を話題にする中で「大仏商法といわれるような受身的な商法」という発言があり、3.「そごうの奈良出店計画、「大仏商法」揺るがず」(『日本経済新聞』1985.3.12)では、「大仏商法——観光地特有の待ちの商売を指す言葉」としています。さらに、記事本文は閲覧できませんでしたが、雑誌記事索引のデータベース[NICHIGAI-WEB MAGAZINEPLUS]から、4.「そごうの出店計画で、迫られる“大仏商法”からの脱皮」(矢鳴雄介、『激流』1985年4月号)というタイトルの記事があるのもわかりました。

昭和60年代以降になるとより多くの記事が見えるようになるので、これらをまとめて「大仏商法の語は、大手資本の進出が活発だった昭和50年代後半頃から使われるようになった」と回答しようとしたところ、周辺の奈良っ子から「もっと古くから聞いていた気がする」「江戸時代、ひょっとするともっと前からあった言葉ではないか」という声もあがりました。たしかに、「奈良というのは昔から大仏商法という言葉があるように」とあるように、「昔から」この語が使われたという形容がされています(『地方博活性化のステップ』『日本経済新聞』1988.4.17)。この時点から5年前も、大仏が作られたころと同じ「昔」ですが、この用法には「ずっと古くから」というニュアンスが感じられます。また、今回使った新聞社のデータベースは、各社が独自に、より古いものや地方版の記事の採録を進めつつある最中ですので、まだ未採録の記事で「大仏商法」が使われている可能性は残ります。なかった、ことの証明はなかなか難しいですが、記載がなかった資料についても、改めて調べなおしてみることになりました。

『梅干しと日本刀』で知られる樋口清之の『出身県でわかる日本人診断』(講談社 1973年)は、観光業者の9割以上が他府県人で、「観光業者の性格をもって奈良県民を評価することは正しくない」という指摘をしていますが、県民についても観光業者にしても「大仏商法」を使っていません。『大和百年の歩み 政経編』(大和タイムス社 1970年)は、他の県庁所在地と比較して奈良市の商店街は言外に貧弱だとし、「一つの都市が成立するためには、それぞれに異なった歴史的条件や地理的条件がある」としており、「大仏商法」の語が普及していれば、言及がありそうな文脈ですが見えませんでした。

人類学者祖父江孝男の『県民性』(中公新書 1971年)は奈良県民の特徴として、個人主義的で商才にたけるとありますが、「大仏商法」の語は見えません。しかし、同じ著者による『出身県でわかる人柄の本』(同文書院 1993年)P.158を見ると、一見の観光客相手に商売がずるくると似た内容を述べつつも、それこそが「大仏商法」だとしています。こうした変化は、やはりこの間にこの語が普及したことの傍証になるかと思えます。

さらに、新聞データベースで単に「大仏」と検索して(そうすると作家の大仏次郎もヒットしてくるので苦労しましたが...)、直接使わなくともニュアンスとして大仏商法的な指摘をしている記事を探しましたが見つかりませんでした。また、著作権の切れた近代の文学作品を中心にテキスト化してWEB公開している「青空文庫」や、東大史料編纂所の「古記録フルテキストデータベース」でも用例は見つけれませんでした。江戸時代の地誌類については、直接はテキストに当たられませんが、記載があれば後世に言及があるかと思えます。なお、辞書だと講談社の『大辞林』が第二版(2012年)よりこの語を立項しています。

結局、調べなおす前どおりの回答をしましたが、もちろんこれが語源を突き止めた結論というわけではありません。1970年代以前のより古い用例が見つかれば、教えていただければ幸いです。

(佐藤 明俊)



ほかの図書館から資料を取り寄せる 「相互借受」サービス

～ここにない本でも読めます！～

当館で資料を探して見つからないときは、まずはカウンターに声をかけてください。もう一度職員がお探しします。それで見つからない場合でもあきらめることはありません。次のような方法があります。



別の資料でも、同じ内容または類似の内容が書かれているものを探す



その資料を持っている図書館を探して、可能であれば、取り寄せて借りる ※有料の場合があります



資料のうち、必要な部分を複写したものを取り寄せる ※有料です



図書館の資料となるように「希望図書」の申込みをする ※新刊書に限りお一人年度内に3冊まで

今回はこの4つの中から **2** の取り寄せて借りる「相互借受」サービスについて、そのお申込みから資料の到着・利用、その後の返却までをご紹介します。

「相互借受」サービスとは

●名称

ほかの図書館から図書館に資料を取り寄せる＝借り受けるサービスです。逆に奈良県内の市町村の図書館や他府県の図書館などへ、図書館の本を貸し出すこともあるため、「相互」という名称がついています。

●取寄せができる範囲

全国の公共図書館、大学図書館のほか、専門図書館や博物館図書室の資料など、とにかく探せる範囲でお探し、可能な限り図書館から依頼します。

●料金

・県内の市町村図書館等や、図書館が協定を結んでいる大学図書館 * の資料を取り寄せる場合は定期便があるため、利用する方の費用負担はありません(1週間に一度、便があります)。

* 2017年3月現在の協定は、奈良学園大学図書館、奈良女子大学学術情報センター、奈良教育大学図書館、奈良県立大学附属図書館、奈良先端科学技術大学院大学附属図書館、帝塚山大学図書館の6大学です。

・上記以外の図書館等については、資料を取り寄せるための往復の送料の実費分を、利用する方にご負担いただいています。資料の大きさや、資料を持っている図書館(以下、所蔵館といいます。)との距離、所蔵館の送付方法により送料は異なります。おむねゆうパックで往復にかかる料金程度とお見積りください。



1 まずはカウンターにご相談ください。所蔵館を調査します。

図書館に無く、類似の本も無い場合は所蔵館を探します。

- ・もちろん、まずは定期便で取り寄せができるところがないかを探します。
- ・次に、有料でも取り寄せをご希望される場合は、国立国会図書館や大学図書館のデータ等、全国の様々なデータベースを検索します。

参考検索ページ：

奈良県立図書館 HP「奈良県内図書館蔵書横断検索」<http://ufinity02.jp.fujitsu.com/nara/>

国立国会図書館「国立国会図書館サーチ」<http://iss.ndl.go.jp/>

国立情報学研究所「CiNii Books」<http://ci.nii.ac.jp/books/>

※このほか資料の特徴により、カウンターでは様々なものを使用します。



2 取り寄せることが決まれば、「相互借受申込書」のご記入をお願いします。

発行後半年経っていない新しい資料や、古くて貴重な資料の場合は、所蔵館から断られることがあります。また借りられてもご自宅での利用ができない、コピーができないという制限がある場合があります。このため、申込時には、次のような条件をご指定ください。

- ・該当の本が貸出中であつた場合→予約をして待つでも借りる or キャンセルする
- ・個人貸し出し（ご自宅等での利用）ができない場合
→図書情報館内で見ただけでもいいので申し込む or キャンセルする
- ・コピーができない場合→それでも申し込む or キャンセルする



3 職員がお申込み内容を再度確認してから、所蔵館に申し込みます。

webだけでなく図書館専用のシステムも使って、次のような確認をしています。

- ・再度定期便で取り寄せられる図書館で持っていないかを調査。
- ・有料で取り寄せる場合は、なるべく近いところがないかを調査(日数と料金が変わることがあります)。
- ・ご自宅等でも利用ができる条件で貸してくれそうな図書館かどうかを調査。

※条件は、申し込んだ後に所蔵館から連絡を受けてはつきりしますが、web等のデータ上に「貸出禁止」などと書かれている場合には先にわかる場合もあります。

図書情報館から所蔵館への申し込み方法は、各館により異なります。図書館専用のオンラインシステム、webフォーム、FAXなどの方法で申し込みをしています(申し込み用紙をそのままFAXするわけではありません)。またこの時に、バーコードをピッと読ませてすぐに貸し出しができるように図書館システムのデータを準備します(図書情報館の資料ではないため、資料のデータは借りる度に作っています)。



4 図書情報館に資料が到着します。

定期便や郵送などで資料が到着後、次の確認と準備をします。

- ・図書情報館に届いた料金（貼られている切手など）と、返却する際にかかる料金（大きさを測ってゆうパックの値段を確定します）を確認します。
- ・梱包を開けて資料に傷みがないかなどをチェックします。
- ・ほかの図書館の資料は特に大事に利用させていただきたいため資料にカバーを付けます。また、貸し出しにつかうバーコードがついた紙を用意します。
- ・お電話、メールなどご指定いただいた方法で、到着を連絡します（有料であればこのときに金額をお伝えします）。



定期便はコンテナで届きます。

5 資料をご利用ください。

資料は3階のカウンターでお取り置きしています。期限内にご利用・ご返却ください。料金が必要な場合はご利用時にお預かりします。

- ・借りて帰られた場合、ご返却は3階カウンターをお願いします(ブックポストに入れると多少の破損がみられることがあります)。
- ・図書情報館内でコピーをされる場合はレファレンスカウンターでお申し込みください。専用の申込用紙があります。資料を傷めないために「上向きコピー機」(印刷したい面を上に向けたまま蓋をせずにコピーができる機械)をお使いいただく場合もあります。

※コピーができない場合もあります。



6 資料を所蔵館に返します。

資料の状態を確認して、所蔵館に郵送等で送り返します。

- ・借りたときと同じ状態かを確認します(資料に破損や書き込みがないか、付録がそろっているかなど)。
- ・図書情報館に送られて来たときと同じように、丁寧に緩衝材等で包み郵便のあて名を書くなどして返却します。
- ・料金が発生している場合は、郵便局や所蔵館に確実に支払いを行います。



以上が「相互借受」サービスの裏方の仕事をふくめての全貌です。みなさんが、見たい資料・知りたい情報を手に入れるために、できるかぎりのお手伝いをさせていただきますので、ぜひカウンターの職員にお問い合わせください。

(北森 亜由美)

「大和郡山と金魚 今昔ものがたり」



金魚の歴史



金魚は日本の夏に欠かせない風物詩として古くから親しまれていますが、その歴史については意外と知られていないのではないのでしょうか。

金魚の原産地は日本ではなく、中国南部の揚子江流域で3～4世紀ごろ野生のフナの中から赤色のものが見つかったのがはじまりとされています。その後、北宋(10世紀)の時代になると盛んに飼育され、いろいろな品種が人為的に作り出されたのが、今日金魚であると伝えられています。日本にいつ頃入ってきたのかははっきりとしていませんが、江戸時代の寛延元(1748)年に出版された金魚飼育のマニュアル本『金魚養玩草』(きんぎょよそだて)に、「或老人の云、金魚ハ人王百五代後柏原院の文亀二(1502)年正月廿日はじめて泉州左海(堺)の津にわたり…」とあり、これが現在の有力な説となっているようです。その後元禄時代になると、絢爛な文化の訪れとともに江戸では金魚を商う店ができるまでになりました。その様子は元禄6(1693)年発行の井原西鶴著『西鶴置土産』にも記されています。この時代はまだ高価で、貴族や豪商など一部の上流階級の豪華な生活の対象でしかありませんでした。江戸時代中期から後期になると一般大衆の愛玩物として普及し、庶民的な文芸・工芸である俳句・川柳・狂歌、錦絵・玩具などにも盛んに現われるようになりました。金魚飼育の長い歴史の中で、突然変異によって現われた様々な形のものが選抜され、さらに交雑によって多くの品種が出現しました。現在、日本で飼育されている金魚の品種は30数種ですが、中国や東南アジアでは100種を超えるといわれています。同一種でこれほど多様な色模様や形がでるのは金魚だけだそうです。



大和郡山と金魚の歴史

大和郡山の金魚養殖の由来については確かな資料はなく、はっきりしたことはわかりませんが、甲斐の国(山梨県)の藩主であった柳沢吉里が、享保9(1724)年に大和国郡山に国替となったとき、前任地で飼っていた金魚を持参し、金魚飼育に熱心な家臣横田又兵衛がこれを飼育したところから始まったとされています。大和郡山柳沢藩の始祖吉里は、五代将軍徳川綱吉の寵臣柳沢吉保の子です。賢君として敬われ、文芸にも秀でていました。文人趣味に長けており、その延長上にある金魚飼育にも力を入れていたようです。幕末の頃になると、藩財政の沈滞に伴って藩士も窮乏に陥り、趣味を内職にして家計を助ける家が増えていきました。そして明治維新後は、職禄を失った藩士や農家の副業として盛んに行われるようになりました。これには最後の大和郡山藩主柳沢保申と次代の保恵が旧藩士の更生事業として全面的に援助をしたことが大きいと言われてい



金魚の競り準備の様子



金魚の競りの様子

また、こういった歴史的背景に加え、大和郡山は立地条件にも恵まれていました。淡水魚がよく育つ基本要因である水質、水利に恵まれた農業用溜池が数多くあり、溜池に自然発生する浮遊生物(ミジンコ類)が金魚の稚魚の餌に適していたことなどが挙げられます。昭和40年代には経済発展と養殖技術の進歩に伴い生産量が年々増加し、国内はもとより欧米諸国や、東南アジアなど外国にまで輸出されました。近年は都市化に伴う水質汚濁等の環境悪化などで生産量は減少したものの、養殖農家約50戸、養殖面積約60ヘクタールで、年間金魚約6,000万匹が販売されています。

う水質汚濁等の環境悪化などで生産量は減少したものの、養殖農家約50戸、養殖面積約60ヘクタールで、年間金魚約6,000万匹が販売されています。

金魚すくい

大和郡山で金魚と言えば「金魚すくい」を忘れてはなりません。「金魚すくい」をスポーツとして高めようと「第1回 全国金魚すくい選手権大会」が開催されたのが平成7(1995)年8月で、今では大和郡山市の夏の行事としてすっかり定着しました。大和郡山と金魚すくいを題材とした漫画『すくってごらん』大谷紀子著 講談社も出版されています。大会は一般、小・中学生、団体(3人1組)の各部門で争われ、和紙を貼ったすくい網「ポイ」を1人1枚使用し、約1,000匹の金魚が入った水槽から3分間ですくった数を競います。平成28(2016)年8月21日に行われた「第22回全国金魚すくい選手権大会」では前日の奈良県予選大会や北海道から熊本まで全国各地で開かれた19の予選大会を勝ち抜いた1,932人もの人々が参加し、熱戦を繰り広げました。この大会での記録は、個人戦の小・中学生の部の優勝者が43匹、成人の部が36匹、団体戦の優勝者は89匹。最高匹数者は予選で記録した60匹でした。過去、個人戦では87匹(第17回大会)、団体戦では173匹(第17回大会)の最高匹数記録があるそうです。



第22回全国金魚すくい選手権

大和郡山の金魚いろいろ

大和郡山市のキャッチフレーズ「平和のシンボル、金魚の泳ぐ城下町。」にあるように、市内では金魚をいたるところで見ることができます。紺屋川には本物の金魚が泳いでいますし、道路のガードレールやポール、マンホールのふた等、様々な場所に



道路のガードレールとポール(北郡山町)

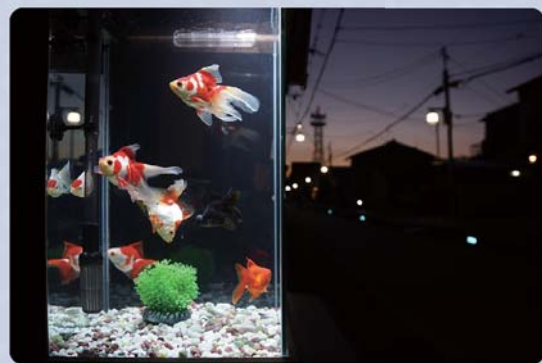


金魚デザインのマンホール

「金魚」の姿があります。「柳町商店街」の一角には、金魚の泳ぐ自動販売機や電話ボックスといったものまで。また、金魚についての歴史・飼い方をはじめ、伝統産業・芸術など金魚に関する広い知識を習得し、金魚を飼う文化の魅力を伝える「金魚マイスター養成塾」も平成27(2015)年から実施され、平成28(2016)年には「全国金魚のお部屋・おうちデザインコンテスト」も行うなど、次から次へと新しいことに取り組み、金魚の街を盛り上げています。

他にも金魚研究家・故石田貞雄氏が蒐集した美術工芸品・生活用具などの「金魚コレクション」を見ることができる箱本館「紺屋」や、生きた金魚や金魚に関する古書や錦絵などを展示している「郡山金魚資料館」など、金魚について知ることのできる施設もあります。

金魚は見た目も愛らしく、見ているだけで心が癒されるように感じます。金魚の癒しを求めて、大和郡山に金魚探索に出かけてみるのもいいのではないのでしょうか。



箱本館「紺屋」前の木製水槽

参考文献

- 柳沢文庫専門委員会編『大和郡山市史[本編]』大和郡山市役所 1966年
- 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第4巻』吉川弘文館 1984年
- 井原西鶴[著]『西鶴置土産/万の文反古 新版(対訳西鶴全集:15)』明治書院 1984年
- 石田貞雄編『金魚グラフィティ』光琳社出版 1986年
- 安達喜之[ほか]著『玉川鮎御用中日記(武蔵)』; 氷曳日記帳(信濃); 松江湖漁場由来記(出雲); 釣客伝(武蔵); 金魚養玩草(和泉)(日本農書全集:第59巻:漁業:2)』農山漁村文化協会 1997年
- 吉田信行[著]『金魚はすくい(講談社+α新書:707-1D)』講談社 2015年
- 「特集:藩主が愛した金魚:郡山金魚事始め」(『ならら:大和路9巻7号通巻94号2006.7月号』2006年)
- 大和郡山市ホームページ「金魚でござる!」(<http://www.city.yamatokoriyama.nara.jp/kgozaru.html/>) 2017.1 現在

※写真はすべて大和郡山市提供

(植原 千恵)

「昭和の奈良県庁舎建て替え」

今年度、当館に搬入された公文書に『奈良県庁舎建築工事日報綴』『排水路その他工事 工事日報綴』『現場説明一件』(右写真)といった奈良県庁舎の建て替えに関連するものがあります。県政の中心である奈良県庁舎は、奈良公園の玄関口である登大路に立地しています。現在の県庁舎は昭和40(1965)年に完成したもので、それ以前の旧県庁舎は明治28(1895)年に建築され、現庁舎の西側に位置していました。



県庁舎の建て替えは、GHQが接収していた元三十八聯隊の跡地が解除され、その跡地へ奈良学芸大学(現奈良教育大学)が移転したことに端を発します。もともと奈良学芸大学があった場所の一角には日本赤十字社の奈良県支部と病院、武徳殿などのほかに数軒の民家もありましたが、この場所が整備されて現県庁舎が建設されました。

この一大事業を実現させたのが奥田良三県知事です。奥田県知事の在任期間は、昭和26(1951)年から昭和55(1980)年までの8期29年と非常に長期にわたりました。その県政は折しも高度成長期が重なり、全国的に庁舎や学校、公民館、図書館といった公共施設が集中的に整備された時代でした。また昭和39(1964)年の東京オリンピック開催により、東海道新幹線や高速道路、宿泊施設の建設など外国人観光客を受け入れるための基礎的なインフラが整備されました。奈良県も戦後から観光開発に力を入れていましたが、奥田県知事はより一層観光開発と道路整備を推し進めました。東京オリンピックという国際的大イベントの開催が県内の観光事業へも大きく影響していたことは間違いなく、例えば昭和36(1961)年に斑鳩町長から奥田県知事に提出された法隆寺門前の駐車場整備工事に関わる補助金交付申請の事業計画書には、「来るべきオリンピックの東京開催を控えて外(国)人観光団の多数の来訪を予想してこれら観光客の受容れ態勢に万全を期することが出来る」(『文化観光施設一件(法隆寺関係)』1-S38-26)という事業効果が記されており、県内自治体の外国人観光客誘致への期待感がうかがえます。

県庁舎の建て替えは、まさに以上のような時代の中で計画されました。設計を担当したのは、片山光生^{てるお}です。片山は当時の建設省近畿地方建設局営繕部建築課長で、県が同局へ設計及び工事監理を依頼したのです。片山は、国立霞ヶ丘陸上競技場(旧国立競技場)の建設に携わり、県内では県庁舎に近接する文化会館(昭和43年完成)や美術館(昭和48年完成)の建設にも関わっています。県庁舎の設計に当たっては県側からいくつかの要望事項があり、片山は奈良公園の環境への調和を重要視して設計を行ったといいます。昭和36(1961)年設計に着手し、37(1962)年に着工、40(1965)年2月に竣工しました。施工業者は株式会社奥村組です。入札に先立ち行われた建築工事の現場説明会には奥村組のほか、清水建設、鹿島建設、大林組、浅沼組といった大手の建設会社が名を連ねます(『現場説明一件』)。奥村組は奈良県庁舎の建設で昭和40(1965)年10月、国内の優秀な建築作品

を表彰する建築協会のBCS賞を受賞しました。

ところで、この県庁舎の建て替えと、当館が公文書資料を所蔵しているのには深い由縁があります。当館が所蔵する公文書の半数以上は旧奈良県立奈良図書館(以下奈良図書館)から引き継いだものですが、奈良図書館が公文書を所蔵するきっかけとなったのが、県庁舎の建て替えなのです。この時、廃棄処分された公文書の一部を奈良図書館の郷土資料室が保管・整理し、利用提供しました。これが、奈良県立の図書館において地域資料として公文書を所蔵する始まりとなったのです。



『奈良県庁建設工事設計図』(66-1-12)。「県庁舎落成記念」には「奈良県庁」「みなさんの県庁」「県庁舎落成記念郵便はがき」「県政展ごあんない」が同封されています。

【参考文献】

- 『奈良県庁舎建設工事の概要』奈良県 1965年
- 奈良タイムス社「月刊瓦版」(編集部)編『奥田県政28年の歩み』奈良タイムス社 1979年
- 片山光生「奈良県庁舎の設計に従事して」(『公共建築』5(4)(19) 1963年2月)

(松田 憲子)

◆「県立図書館情報館入館者 600 万人達成！」

平成28(2016)年10月26日

当館では、昨年10月26日に入館者数が600万人に達しました。平成17(2005)年11月3日の開館から3,209日目となります。11月3日には、開館11年目を迎えましたが、それに先立つ達成となりました。



◆「なら・図書館に集う会」結成

平成28(2016)年11月24日

当館では、県内の企業・団体などの代表者の方々の発案により「なら・図書館に集う会」が設立されることになりました。この会は、昨年の開館10周年にあたり、立ち上げていただいた「奈良県図書館情報館開館十周年を祝う記念事業の会」の後継の会として、図書館情報館の活動を支援・応援いただくとともに、個人、法人の方々とともに奈良を発信する様々な取り組みを行っていく予定です。

事業紹介

「電子図書館構想について」

当館では、開館10周年を迎え、次の10年を見据えながら、電子書籍やデジタル化資料にハイブリッドな形での利用環境を求める時代の趨勢に対応するために、「電子図書館構想」策定を目指し、平成28(2016)年度から3年計画で構想をまとめ、これからの図書館のあり方のかたちにするべく、検討を進めています。

昨年5月26日に「第1回電子図書館構想検討会議」を開催しました。学識経験者・専門家の方々から、「一般電子書籍サービスは、世の中の流れ」、「地域資料のデジタル化は、奈良県の使命として必須」、「単なるデジタル化ではなく、画像にテキストをいれるなど、デジタル化した資料が利活用される方策を考え、継続的に発信していくことが重要」といったご意見、アドバイスをいただきました。



これをうけて、現在、当館では、古文書のデジタル化(五條市表野家文書)や情報誌『ナラヲヨム』の電子書籍発信などのパイロット事業に取り組みながら、「電子図書館構想」に向けた素案を作成しているところです。

以上の事業を進めながら、平成30(2018)年度までに、「電子図書館構想」を策定する予定です。

(川畑 卓也)

平成28年度イベント・展示より

■Course

学び直し講座◆ 図書館学校

高校の科目から、
今につながるテーマをもう一度



本年度から「学び直し」をコンセプトにした「図書館学校」を開校しました。

おもに高校時代の教科科目から、今につながるテーマをピックアップした科目&講師陣が揃う充実の講座内容で始動。第1期受講生は、募集開始から約2週間で定員50人に達したため、急遽募集枠を広げ80人でスタートしました。開校記念講座は「奈良の歴史を地図で読む」。江戸中期から平成までの奈良の地図をもとに千田館長がレクチャーを行いました。

第2期、第3期は募集人数を100人に拡大しましたが、いずれも早々と定員に。図書館利用者のみなさんの「学び」への関心の高さを感じさせる結果となりました。

千田総館長による「第3期開校記念講座」のようす(1月24日)

《開催期間・講師》

- 第1期 5月～7月……開校記念講座:千田稔 図書館情報館長/国語:植村正純 志賀直哉旧居文学講師・京都大学以文会会員/数学:神保敏弥 奈良教育大学名誉教授/社会1:今尾文昭 前奈良県立橿原考古学研究所調査課長・関西大学非常勤講師/社会2:浮世博史 西大和学園高校教諭/古典から考える心の健康:井阪秀高 有限会社カルテベート代表取締役社長
- 第2期 9月～11月……開校記念講座:千田稔 / 国語:植村正純 / 数学:神保敏弥 / 社会1:今尾文昭 / 社会2:浮世博史 / 倫理:野島秀雄 奈良先端科学技術大学院大学特任教授 / 英語:森本重和 元奈良県立畷傍高等学校長・奈良学園中学・高校 校長
- 第3期 1月～3月……開校記念講座:千田稔 / 国語:植村正純 / 数学:神保敏弥 / 社会:今尾文昭 / 英語:森本重和 / 地学:井阪秀高

《開催場所》

図書館情報館交流ホール

■Course

出前図書館◆ 聖徳太子を学ぶ連続講座

《講座+貸出+利用者登録》
図書館情報館を『出前』



平成33(2021)年に「1400年御遠忌」を迎える聖徳太子について学ぶ「聖徳太子を学ぶ連続講座」を開始しました。

本講座のサブタイトルは「出前図書館」。当館を飛び出し、「聖徳太子ゆかりの地」である王寺町、大和郡山市、斑鳩町、大阪市阿倍野区に会場を移して開催しました。

各講演会場前には「利用者カード」をその場で発行するサービスカウンターや、当館所蔵の「講座関連本」が借りられるコーナーを設置。図書館情報館を「出前」する初の試みとなりました。また、第4回「聖徳太子ミーティング～太子トークイベント」では、図書館情報館と達磨寺本堂(王寺町)、西大和学園高等学校の3カ所で同時開催。会場をインターネットでつなぎました。

第4回「聖徳太子ミーティング～太子トークイベント」のようす

《テーマ・開催日・場所・講師》

- 第1回「聖徳太子伝承 今に受け継ぐ」、7月16日(土)、王寺町地域交流センターリーベルホール(王寺町)、日野周圭 達磨寺住職、喜多信子 額安寺副住職、鈴木貴晶 信貴山真言宗管長・総本山朝護孫子寺法主
- 第2回「法輪寺の創建をめぐって」、8月18日(木)、やまと郡山城ホールレセプションホール(大和郡山市)、井ノ上妙康 法輪寺住職、平田政彦 斑鳩町教育委員会生涯学習課課長補佐
- 第3回「聖徳太子と法隆寺」、10月29日(土)、図書館情報館1F交流ホール、大野玄妙 法隆寺管長、鈴木嘉吉 元奈良文化財研究所所長
- 第4回「聖徳太子ミーティング～太子トークイベント」、12月10日(土)、図書館情報館1F交流ホール+達磨寺本堂(王寺町)+西大和学園高等学校、王寺町達磨寺:平井康之 王寺町長、日野周圭 達磨寺住職 / 西大和学園高校:上村佳永 学園長、浮世博史 教諭、生徒のみなさん / 図書館情報館:千田稔 館長、コーディネーター:関口和哉 読売新聞大阪本社文化部編集委員
- 第5回「中宮寺の歴史」、12月14日(水)、いかるがホール 小ホール(斑鳩町)、日野西光 中宮寺門跡、荒木浩司 斑鳩町教育委員会生涯学習課文化財係係長
- 第6回「太子信仰をめぐって」、2月19日(日)、あべのハルカス25F 会議室E・F(大阪市阿倍野区)、南谷恵敬 和宗総本山四天王寺執事(法務部長兼勸学部長)、近藤本龍 磯長山叡福寺住職

千田稔 図書館長と多彩なゲストによる公開講座「図書館劇場」(年6回)をはじめ、落語会、コンサート、各種相談会、パネル展示、古文書講座、マーケットなど、今年度も数多くのイベント・展示を展開しました。開催した中から、ピックアップしてご紹介します。

・掲載イベントはすべて図書館主催事業。「出前図書館◆聖徳太子を学ぶ連続講座」のみ読売新聞社共催。 ・文中敬称略

■Book talk

talk around books～ 本とその周辺をめぐる読書会

読み聴き味わい、語りあう
『新しい』読書会



文学作品に付随する、いわば「本の外」を読む楽しみを体験することで、情報へのリンク力を養う、新しい読書会「talk around books～本とその周辺をめぐる読書会」。昨年度に続き、堀部篤史 誠光社店主をコーディネーターに迎え開催しました。堀部さんは、本を読むことについて「あら筋だけではなく、書かれた時代背景、作家の個性、舞台装置である場所や文化、作品の

中で語られる本・映画・音楽などを読み解くことで、書物の外側へと繋がっていく『行為』と解説。「毎回、一緒に一冊の本を手取ることで、外の世界へと繋がっていく快感や驚き、読書がもたらしてくれる『リンク』について考えられたら」。堀部さんが課題本に合わせて選んだフード＆ドリンクを味わいながら、作品世界にちなむ資料に触れ、映像や音楽を見て聴いて語り合う——五感で楽しむ読書会は毎回満席の盛況ぶりでした。



第1回のような様子

《開催日・課題図書》

- 第1回：8月26日(金)、『パルプ』チャールズ・ブコウスキー(新潮文庫)
- 第2回：9月23日(金)、『僕の名はアラム』ウィリアム・サローヤン(新潮文庫)
- 第3回：11月25日(金)、『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』フィリップ・K・ディック(ハヤカワ文庫SF)
- 第4回：12月16日(金)、『サマー・プロント』エイドリアン・トミネ(国書刊行会)
- 第5回：2017年1月27日(金)、『エドウィン・マルハウス』スティーブン・ミルハウザー(河出文庫)
- 第6回：2月24日(金)、『ギンズバーグ詩集』アレン・ギンズバーグ(思潮社)

《コーディネーター》
堀部篤史 誠光社店主

《開催場所》
図書館情報館交流ホール

■Exhibition

人形作家Yoko-Bon 『人形絵本 まんまるパン』の世界展

絵本に使われた人形&ジオラマ
全シーンを完全再現



今から半世紀前、日本で大ブームを巻き起こした「人形絵本」が、奈良県田原本町在住の人形作家Yoko-Bon(ヨウコ ボン)の手で『人形絵本 まんまるパン』(群像社)として復活したことによる展覧会。

本展では、絵本に使われた全ジオラマ&人形+新作を公開したほか、制作の軌跡をパネルで紹介。古き良き人形絵本を現代風によみがえらせたYoko-Bonの創造性に注目が集まりました。関連イベントも充実。『人形絵本 まんまるパン』がロシア民話であることにちなみ、「ソビエトアニメーション上映会」、「ワークショップ オリジナル『マトリョーシカ』をつくろう!」や、「講演会『まんまるパン』ができるまで」などを開催しました。



ギャラリートーク中のYoko-Bon

《開催期間》

9月6日(火)---9月29日(木)

《場所》

2Fエントランス

《関連イベント》

- ソビエトアニメーション上映会
[日時]9/11(日)13:30—15:00 [場所]1F交流ホール
- ワークショップオリジナル「マトリョーシカ」をつくろう!
[日時]9/11(日)①11:00-13:00 ②15:30-17:30 [場所]2Fエントランス
- 講演会『まんまるパン』ができるまで
[日時]9/18(日)13:30—14:30 [場所]交流ホール
[登壇]人形作家 Yoko-Bon、訳者 片山ふえ、群像社 島田進矢
- 人形作家Yoko-Bonのギャラリートーク
[開催日]9/10(土)11(日)17(土)18(日) 19(月・祝) 22(木・祝)24(土) 25(日) [時間]①11:00-11:30 ②14:00-14:30 [場所]2Fエントランス
- まんまるパンマーケット
[開催日・時間]会期中の土日祝、各日10:30-16:00 [場所]2Fエントランス

所蔵資料紹介

かみつかさしょうけん
『木像』上司小剣著
今古堂書店 明治44(1911)年

奈良県出身の小説家上司小剣は、大正期に田山花袋や正宗白鳥らと並び活躍した作家ですが、現在では残念ながら「忘れ去られた作家」という感が否めない人物でもあります。昭和27(1952)年に発行された岩波文庫『鱧の皮他五篇』の巻末に収録されている解説のなかで宇野浩二は「私は、小剣の全盛期(といふものがあれば、それは大正三四年から十年ぐらゐまでである、と思ふ、つまり、その間の七八年か十年ほどが、まづ「歴とした作家」として存在した時代」と述べているように、小剣が作家として精力的に活動した期間が短かったためではないかと思われます。

小剣は明治7(1874)年に奈良市水門町で生まれ、父が現・川西市にある多田神社の宮司となったことに伴い兵庫県で育ちました。幼少期には母との死別、父の再婚などを経験します。『神主』『父の婚禮』などの作品には、彼の生い立ちが影響を与えていると考えられています。

やがて明治30(1897)年に上京し、知人の紹介により読売新聞の記者となり、大正9(1920)年に退社するまでの24年間、文芸部長や編集局長などを歴任します。のちに、読売新聞時代の回想記として『U新聞年代記』を著しました。小剣の文筆活動はこの新聞記者時代から本格的に始まったようで、『木像』も明治43(1910)年に読売新聞で連載小説として発表されたものです。小剣は小説の寄稿だけではなくエッセイやコラムなども担当しており、「大和の聖地巡礼」「大和路の晩春」と題した奈良に関する記事も執筆しています。



表紙

記者時代には、正宗白鳥や徳田秋声など明治・大正期を代表する文豪たちと交友関係を深めたようでした。小説『木像』の装幀と口絵は、親交のあった正宗白鳥の弟である洋画家正宗徳三郎によるものです。



表題紙



口絵

『木像』は、奈良の町中で製麺業を営む主人公・福松の生活を描いたものです。発表当時は大きく話題にならなかったようで、小剣と親しかった正宗白鳥は『旧友追憶記』のなかで、「『木像』という長篇が新聞に連載されたが、私はこれは読んでいない。面白いものだといっていた人もあったが、文壇で価値を認められるには至らなかった」と述べています。しかし、のちに青野季吉が「小剣の文学要素をことごとく集積した代表作」と評し、『奈良近代文学事典』では浦西和彦氏が「奈良の年中行事が点綴される中に、明治四十年代という過渡期に、古都に生きる小商人の生活や不安が見事に描かれている」と述べており、評価が見直されています。

【参考文献】

- 上司小剣作 『鱧の皮：他五篇 (岩波文庫)』 岩波書店 1952年
- 吉田精一編 『水野葉舟中村星湖三島霜川上司小剣 (明治文学全集)』 筑摩書房 1969年
- 浦西和彦、浅田隆、太田登編 『奈良近代文学事典』 和泉書院 1989年
- 正宗白鳥著 高橋英夫編 『新編作家論 (岩波文庫)』 岩波書店 2002年
- 荒井真理亜著 『上司小剣文学研究』 和泉書院 2005年
- 「大和の聖地巡礼」 読売新聞 1943年1月6日朝刊
- 「大和路の晩春」 読売新聞 1928年4月30日朝刊

(谷川 幸子)

編集後記

開館11年目を迎え、「親しみのある図書情報館」を目指して新たな第一歩を踏み出しました。
書籍の電子化や情報のWEB発信など時流の変化に取り残されることなく波に乗り、これからの図書館の利用方法や、地域の資料の活用、住民や他の機関との連携など幅広い視野に立ち、出来ることから地道に歩んでいきたいと考えています。
入館者数600万人を越えた今、さらに多くの皆様にご利用いただけるように、図書館の利用者と職員という枠を超えて心をふれあわせる切っ掛けとなるような館報を目指します。

(松村)

奈良県立図書情報館報 芸亭 (うんてい復刊) 第9号

発行日 平成29年2月28日
発行人 千田 稔
発行所 奈良県立図書情報館
〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000
TEL.0742-34-2111 FAX.0742-34-2777